岡崎ホスピスケアを考える会通信

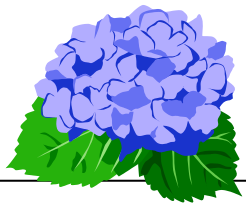
5号
平成１２年６月９日

４月の例会報告

「いちど遺言を書いてみませんか」
弁護士：宮道佳男

本日、自筆遺言書についての書き方、注意事項などをいろいろな例題を上げてわかりやすく説明してくださった。

主人と子供たちへ残す言葉を書いてみた。書いては消し、消しては書く作業をする。何を私は伝えたいのか、自分自身への問いかけの時間となった。



５月の例会報告

「死の準備教育」講演：安江満悟先生

今日の話の中で一番心に残ったのが「死を生と同じように日常の中に置く」と言われたこと。それでは「死の準備教育はいつから始めるのか」それは「生まれたときから・死が高い確率で予測される患者さんの主治医になったとき・死期が迫ったとき」と言われた。

「死」を意識することで逆に、「今」をおろそかにした日常を送ることはできないと確信した。「これで良かった」という最期を迎えるために私は今から準備を始めよう。安江先生が持ち込まれた、「遺影」のあの素敵な笑顔のように・・

ふれあい看護体験に参加して

“看護体験”に参加してみて、やはりというか、やっぱりというか、思い描いていた一日を過ごすことはできませんでした。

前日までは車椅子を引いて外を散歩したり、和んだ雰囲気の中で体をふかせてもらったり、足を洗わせてもらったり、そういったことならば私にもできるような気がしていました。

結局私がしたことといえば、あるおじいさんの話相手に少しだけなれたことと、手をさすることの二つだけでした。やはり“看護”というものが身についていないというか、一日だけではどうにもならないし、毎日の継続、どれだけ親身になれるか、自分ならどうしてほしいか、よく考えて看護したいと思いました。

今､私にできる看護、それは身近にいる子ども、主人、両親などが看護が必要になったときに支えあい、必要なことが押し付けではなく、自然にできることではないかと考えます。

＜病棟の風景＞

骨折の手術後、リハビリに励む８８歳のＫさん。

シャワーで体を洗うとき、車椅子を押すとき、昼食の盆を運んでも、明るく「ありがとう、悪いねー」と繰り返す。

耳が聞こえにくいので大きな声で問い返す。そのたび笑顔で答える看護婦さん。

松葉杖の少年が車椅子のＫさんの前になり、後ろになり話しかけ「車椅子は大きく回って、そうそう、上手だね。Ｋさん」「あれ、左に行っちゃう、だめだねー、うまくならん。アハハ」と笑うＫさん。「Ｋさん、自分の部屋わかる？」「わからん」「忘れちゃだめだよ。こっちこっち」と松葉杖で先に歩く少年。「ありがとう。あの子、いい子だよ、いつも気にしてくれるんだよ」と・・・・。廊下から聞こえる２人のやりとり。静けさの中にあるあたたかさ・・・。

有吉院長は、挨拶の中で看護の心とは援助（専門的な技術を伴う）と共感（人間的な心の感動）だと言われた。患者と医療者が互いに支えあい、共感できるといいなと思った。

手縫いの会報告

４月１１日：雑巾７０枚・マジックファスナー付ベルト３本　→　愛知病院
５月　９日：雑巾４０枚・アイカバー１枚・ベルト２本　→　愛知病院
６月　１日：雑巾７０枚　→　市民病院

以上、それぞれの病院にお届けしました。
また市民病院からは氷嚢袋１５０枚・湯たんぽ袋１５０枚を依頼され、現在製作中です。
何分にも数が多いので、縫って下さる方、木綿の布・新しいタオルなどを寄付してくださる方がありましたらご協力お願いします。

「手縫いの会」連絡先：勝川　０５６４－２５－６９６１
：服部　０５６４－２３－１２６３

◆報　　告

☆**「ホスピス一般研修会」**４月４日（火）（13 時～15 時 30 分）
愛知国際病院ホスピス一般研修会に６名参加しました。

☆**「第５回　日本死の臨床研究会中部支部総会」**５月２７日（土）公衆衛生センター
たくさんの会員の方が参加されました。

◆ご 案 内

【6　月】
例　　会：日　時　6月　9日（金）１０時～１２時　県立愛知病院地域研修室
テーマ　「自分のカルテを作りましょう」　講師　有吉寛県立愛知病院院長
手縫いの会：日　時　6月13日（火）１０時～１２時　県立愛知病院看護相談室
【7　月】
手縫いの会：日　時　7月１１日（火）１０時～１２時　県立愛知病院看護相談室
例　　会：日　時　7月２１日（金）１０時～１２時　県立愛知病院看護相談室
テーマ　「患者と医者の信頼関係を築くには」講師　内田達男県立愛知病院外科医

【医療相談室ができました】
県立愛知病院の中に相談室ができました。
場所は１階正面玄関エレベーター横の「医療相談室」です。
常時看護婦がいますので、困っていること・聞きたいこと・聞きそびれたことなど、気軽にご利用ください。

【電話相談室「がん心のケアほっとライン」のご案内】
電　話　番　号　０５２－８３６－７５６５
毎週木曜・金曜　１０：００～１６：００　（祝日休み）
「がん心のケアほっとライン」は、進行がんなどの患者さんやご家族、ケアをする方の胸の思いを、電話を通して無料でお聴きします。聴き手は、公的機関で電話相談を長期間担当した経験があり、がん患者さんやご家族の心のありようについて研修を積んだボランティアです。

「がん心のケアの会」（代表　毛利裕子）

伝言板

「私たちにとって一枚の雑巾は誰にも渡せない大切なものなのです。」
会員でもある愛知病院の沢柳看護部長さんがかつておっしゃった言葉を忘れることができません。病室のベッドサイドを雑巾で拭きながら、患者さんとおしゃべりをし、また黙ってる人にはそっと状態を看ていくそうです。
雑巾は拭くためだけの物ではなくその時間を通して患者さんと心を通わせる、まさにホスピスケアの道具なのです。「いつも感謝して使わせて頂いています。」そんな言葉かけを私たちにしてくださる看護婦さんを通して患者さんの役に立っていることをお知らせします。